

交樂齋翁生興行人秋採繪稿



定價金十錢

國之橋
交樂齋

花の彌生のいろ艶やかに皆々様には益々御機嫌お麗はしく御座被遊御慶此事に御座ぬます。 偕て當文樂座儀新築復興以來絶大の御ひびきを賜はり、劃然「皆様の文樂座」となりまして逐日の盛況を贏ち得ましたる段厚く御禮申上ます。 當月は復興三の替りといたし狂言の儀も一段考慮いたし春三月にふさはしき名作を上場致しますと俱に輓近の名匠竹本越路大夫並びに名庭絃阿彌翁の七回忌追善興行を仕る次第で御座ぬます。 尙越路の遺子常子太夫の四世さの大夫襲名と錦上更に花の觀を呈す極彩色郷土藝術の精華で御座ぬます。 春三月！まづ四ツ橋文樂座独自の東洋趣味を満喫されんことを……………。

昭和五年三月

四ツ橋

文樂座

昭和五年三月六日 初日

初日より 午後二時開演
二日目まで
三日目より 午後三時開演

二日目よりの

・御觀覽料・

- 一等お座席 御一名——金三圓五十錢
- 一等椅子席 御一名——金三圓
- 二等席 御一名——金一圓五十錢
- 三等席 御一名——金八十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一—番
専用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ、御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

交樂齋絲菜興行

三味線

天大... (Vertical text on the left side of the main content area)

中... (Main body of vertical text columns, including various characters and symbols)

天大... (Vertical text on the right side of the main content area)

天大... (Bottom section of vertical text columns, containing smaller characters and symbols)

天大... (Vertical text on the right side of the bottom section)



くらひは華萬の術藝土郷月三・春

文樂座人形浄瑠璃

前 南都 二月堂 良 辨 杉 由 來

志賀の里の段
(三時開幕の豫定)
櫻の宮物狂の段
(三時三十分あきの豫定)
東大寺の段
(四時十分あきの豫定)
二月堂の段
(四時廿五分あきの豫定)

御食事時間 幕間 二十分間の豫定

七回忌 追善狂言 空 也 念 佛

掛合

御食事時間 幕間 二十分間の豫定

妹脊山婦女庭訓

(六時五十分開幕の豫定)

山の段

御休憩時間 幕間 十五分間の豫定

切 お久松 新 版 歌 祭 文

野崎村の段

(九時十分開幕の豫定)

打出し十時三十分の豫定

(舞臺装置)

杉田種次





文樂座由來

人形淨瑠璃緣起



當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始り、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失し其後本城を

物色中このほご四ツ橋に新築いたしました、而も日本にこれ一座ぎり云ふのは心細い次第で、彼の能樂も同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかご考へます次第で御座ゐます。序でなから此人形は大體、首、胴、手及び足の四部に分ける事も出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用名座天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名も出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源

藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋の盛綱』のごとき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛などもこれです。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴ごありますの、今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があるご云ひます。兎もあれ菅相丞や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だご申します。それから若男といふのは源太ごも呼んでゐるごか聞きますが持役ごしては『朝顔日記』

の駒澤に『太子』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめるこ『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをするこ云ひます。又所謂おやまの中にばおむすこ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壘坂』のお里『妹背山』のお三論などを勤めるのもあります、南水漫遊に傾城さあるのも多分之と同じものかこ考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。

今から見ても簡単なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に始

まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木、偶や土、偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三ご云ふのが傀儡を舞はせた事か『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、ご云ふ想像は出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座いますか、浄土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものでらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線も渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃さいふものも出來た、即ち京都の目貫屋ご云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形ご此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち徳川の始頃です。忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町さか葺屋町さか、櫛が立つて此人形芝居が繁昌したのであります。順序として當然此頃には最上人形の類も増してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形さて首があるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈椽が始めて其手足の工夫もしたものです。由來此椽號なるものは人形師の所有なりを後に淨瑠璃太夫の勢強くこれを専らにするに至つたこの事。さて竹田のからくり人形も出來たり、野呂松のの

る、其人形が出來たり、次郎三郎がおやま、人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になるさ大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書き卸し、しかも其人形遣ひとして辰松八郎兵衛と云ふ名人も出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたこと云ふのも、始めは此人形を下の幕の上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに從つて自然遣ひ手の身体も動く之が見好くないから黒幕の陰に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が袴を着て手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出來るあり、即ち西と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競争的に繁昌を來したのですから、從つて其進歩發達は眼覺しいものもあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座『大内鑑』の典勘平彌勘平も腹をふくらまし、元文になると豊竹座『武烈天皇

儀ぎの佐手彦さてひこの肩かたを動かうごかしはじめる
など、非常に發達はつたつを遂たしたのでありま
す。即ち言ことばを換かげば當時とうじ名人めいじんの遺いひ
手てが輩は出した次第しだいで、中なかにも吉田文
三郎きちだぶんざうの如ごときは享保きやうほ始め竹本座たけもとざの『國
性爺こくにや後ご日合戦にっごうせん』に初出勤はつしゅつじん、錦舎にしんしゃの出遺しゅついで
ひに片手かたての晴業はるわざを示しして以來いらいさいふ
ものは實じつに此人形このにんぎやうについて工夫くふうを
凝こらしたもので、其一例そのいちれいを舉あぐれば
ある『夏祭なつまつり』の人形にんぎやうに始め帷子衣裳かたびらころもじやう
を看みせるさか、或あるは其遺そのいつた一寸女すたうな
房ぼうおたつに桔梗ききやうの帷子かたびら黒繻子くろじゆの前まえ
帶おび淺黄あさぎの綿帽子わたぼうしを着つけさせた如ごとき、
今いまなほ歌舞伎かぶきで眞似まねてる所事實ところじじつ此時このとき
代だいさいふものは繰盛くりもんを極きめて歌
舞伎かぶきばあれご無ないも同然どうぜん、幟のぼりは林立りつりつ

して其眞實まことまことは凄すまじい有様ありさまであつた
と云いひます。江戸えどでも矢張やこれ之これと同じ
く、慶長けいぢやうの昔薩摩淨雲むかしさまじやうぐんか淡路たんじゆの人形にんぎやう
舞まし此この人形にんぎやう芝居しばいを始めはじめて以來いらい、各
派はの淨瑠璃じやうるり芝居しばいが誠まことに繁昌はんじやうしてゐた
のです。享保きやうほに一端大阪おほさかの義太夫ぎだう
芝居しばいが入はいつて來きてからと云いふものは
又漸次またまたに其勢力そのぢりき範圍はんいを成なつてしまひ
御案内ご案内の同様どうように歌舞伎かぶき狂言きやうげんなどは全
く此人形このにんぎやうの眞似まねのみ演まつてゐたもので
あります。前まえ云いふ辰松たつまつも三郎兵衛ざうべゐも
共に江戸えどへ來きて其妙技そのまうぎを揮ふるつた事ことが
あるのです。兎うも角かくも此人形このにんぎやう芝居しばいの
全盛ぜんせいは凡おほそ百年間ひゃくねんかん、寶曆ほうりきから明和めいわい以
後ごになるに漸次またまた本場大阪ほんばおほさかでも亦江戸またえど
の方ほうでも其勢力そのぢりきは歌舞伎かぶきに奪うばはれ、

結局けつぎゆあの大坂おほさかの新興しんきやう北堀江座きたほりゑざすらも
大した事ことには成ならなかつたと見るべ
きであります。然しかし此間このあひだに在あつても
人形にんぎやうは其一個そのいこに所謂所謂黒坊くろぼう四五人ごにんも掛
かり、或あるは出遣しゅつでんひ二人ふたりも掛かかる事こと、
其他その他太夫たうの引拔ひきは早替はやか替かひなどのケレン早
業わざは愈々いよいよ進歩しんぷを見みせたので、而しかも操
芝居しばいとしては前述ぜんじゆの如ごとく、其後そのごは盛
んならぬ各座かくざの起伏きふ消長しょうぢやうが今日こんにちに
至いたりしと云いふ次第しだいで、それも今いまや獨
り當大阪たうおほさかの文樂座ぶんがくざが現存げんぞんするのみで
他ほかには語るべきが無ないのであります



志賀の里の段

豊竹つげめ太夫

野澤勝市

野澤吉左

竹澤團二

鶴澤福太郎

鶴澤友庄

鶴澤清勝

雲八

人形

一、渚の方 吉田文五郎
一、光丸 桐竹紋司

前 南都良辨杉由來
二月堂

志賀の里の段

櫻の宮物狂の段

東大寺の段

二月堂の段

この『良辨杉』は加古千賀女の作で豊澤團平師の節附であります。千賀女は團平師の妻女でこの他にも『靈驗記壺坂』の力作があります。『良辨杉』の初演は明治二十年二月の彦六座の手欄に掛けられたもので初代豊竹柳適太夫三味線は三世豊澤廣作後六世廣助師に創まつたものでありま

す。其後歌舞伎へも移入せられ雅趣豊かな至難の名曲として傳へられて来たものです。只今では古軼太夫の極め附となつてゐますが古軼太夫の初演は大正十年五月の御靈文樂座で線は故人三世清六でありました。その後四代目清六の線で大正十四年四月の御靈に上演し好評を博した秘曲であります。志賀の里の段、櫻の宮物狂の段、東大寺の段、二月堂の段から成立つてゐます。

志賀の里の段

宇治は茶所、茶は縁所、宇治におさらぬ志賀の里、野面瀬も畑も一様に、赤い襷に手拭も、思ひ思ひの

- 一、腰元 小枝 桐竹紋 太郎
- 一、腰元 藤野 吉田市 松
- 一、腰元 春枝 吉田玉 米

櫻の宮物狂の段

(この間三十ヶ年経過)

- 豊竹 駒 太夫
- (豊竹) 和泉 太夫
- 豊竹 島 太夫
- 竹本 鏡 太夫
- 竹本 源路 太夫
- 豊竹 富 太夫
- 竹本 文 太夫
- 豊竹 辰 太夫
- 豊竹 千駒 太夫
- 竹本 長子 太夫
- 竹本 陸路 太夫
- 竹本 播路 太夫

紅しぼり、一番つみも早や過ぎて、

二番中ばの卯の花や、空に一聲時鳥泣きつる方のゆかしさよ……

暢びやかな志賀の里を叙景し、宮家の舊臣水無瀬左近の妻渚の方は今は

後家のうら淋しく忘れ遣みの若様を伴つて茶摘の宴に興じてゐたれると

忽ち起る一陣の早風、あはやと驚く女中達の立ち騒ぐ中に山鷲が羽風

と共に若君を掴んで大空へ飛上つたのです。母の渚は光丸よ光丸よと轉

び乍ら空を見上げて後を追う行きま

すが、天にも地にもかげむへのない忘れ遣みの一人子をさらはれた母の

慄きは氣も狂亂です。

櫻の宮の段

前段志賀の里の段より三十ヶ年経過の春、M見渡せば大江の岸の春霞

四方の浦々寄波に、ちらく散花の、たなびく雲さうたがはれ、

鳥居も花につままれて、色香櫻の宮柱、ゆるかぬ御代の花遊山、と櫻の

宮の春景色は今が煉亂です。M夢にも夫と面影の、忘れかれた

る恩愛に、焼野の雉子夜の鶴、聞さへ鳥の恨めしく、我古郷も志賀の里

迷ひ出でたる渚の方、姿もふりも見

るめさへ、縫の小袖もきれんくに、現心の亂れ髪、櫻の枝に葉草履、ぶ

らくく迷ひ来る……三十

鶴澤 叶

野澤 勝平

野澤 八助

鶴澤 友若

鶴澤 友衛門

鶴澤 叶寛太郎市

人形

一、吹玉屋 吉田玉市

一、花賣女 吉田扇太郎

一、渚の方 吉田文五郎

一、子供 大勢

年前茶摘の遊山に愛し子をさらはれた母の渚は狂亂してこゝに現はれたものです。

さめて、爰に心も濱千鳥、今はおそし南都東大寺さして急ぐのです。
南都東大寺の殿

M 當途も浪の川上へ、さまよひ行

M 名も高き名も南都の大寺院、時の帝の勅願所、宗法廣き東大寺……

かば思はずも……さ氣の付た渚の方

は奈良東大寺の景。M 老の身の昔

光丸君をさらはれたさきに既にこの

の姿いつしかに、我にもあらで幾

身も果つべきに幾年この姿を晒した

せる、何國の浦に吟ひし、亂心の夢

ここのあな恥かしや、せめて我子の

さめて夫ぞと思ふ人づても、心の儘

菩提のため志賀へ歸て身は墨染の衣

に奈良坂や、漸爰に渚の方、大門

にかへ御佛に仕へんと船を呼びます

近く歩みより……老年老ひた渚の方

さ、人々の咄しに、なんぞ東大寺の

は船中で聞けば聞いて来たもの、非

大僧正良辨聖こそ稚い頃に大鷲に捕

人乞食の何さして誰に尋ぬるすべ

はれて成人の後廣大の學者世に聞え

なく、思案にくれてある處へ伴僧の

高し、こ聞いた渚は親心、現心の夢

來かゝるに、お慈悲に僧正の身の素



東大寺の段

竹野澤 鶴澤 竹澤 鶴澤
相生太夫 歌之助 貴之助 友之助

人形

一、渚の方 吉田文五郎
一、雲彌坊 桐竹門造

性お聞かせ下されと伏し拜みます、
伴僧も身は御佛に仕への僧、不惑や
なご、僧正には日日春日へ御禮拜、

其御下向には二月堂、お禮も濟めば

其昔驚に取られ危く楯にこまりし折

通りかゝりし前僧正のお助けありし

杉の木へ日参遊ばすゆへ事の仔細を

杉の木へ張付け置けばお目に止まら

ふご教へました。渚は伴僧の介添に

て杉の木へ認めた紙を張り、老の心

の勇駒運ばぬ足を踏みしめくたご

くご二月堂へ向ひます。

二月堂の段

いよく母の渚の方と良辨僧正との

對面でありまして、巨匠古靱大夫獨

自の藝域で皆様を恍惚ささては泣か
さすには描かぬ入神の語り場です。

さて床本を寫しますと、M ゆかす

共、草は燃なん春日野の、三笠に近

き木の間より、重重ねし二月堂、利

益も深き御佛の軒に見上る葉も枝も

良辨杉と名も高き、されば良辨僧正

は日毎くの御禮拜早先供のせいし

聲網代の輿のおごそかに近習の侍そ

ば法師かしづき随ひ、ゆうくご春

日の社禮拜し續いて御所二月堂、品

いも高き石垣や御ひろいなる緋の衣

錦の袈裟をかけまくも處なつかしき

杉木立御手にかゝる露涙、水晶の玉

さらくご、いと殊勝なる御祈念御

二月堂の段

切 豊竹 古靱太夫

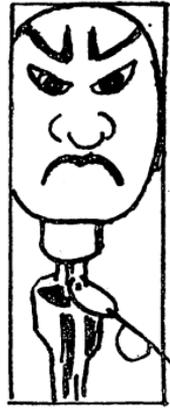
鶴澤 清 六

人形

- 一、良辨上人 吉田 榮 三
- 一、渚の方 吉田 文 五 郎
- 一、弟子僧 吉田 傳 之 助
- 一、弟子僧 吉田 覺 三 郎
- 一、先 供 吉田 文 作
- 一、供 廻 り 大 勢

手をさめて生茂る杉の梢をながめ
 たま〜ハ、誠や人界の生を受、生長
 なすも父母の思ふにつけても我身の
 上何國の誰か種成か稚き時驚にさら
 ばれた此大木の梢の空小枝にさいま
 り危ふくも既に悪鳥の餌食にも引裂
 れなん其折から師の僧正の御情をう
 け命助り剩さへ忝なくも内裏にて御
 宿方の助力を以て成人なせしも師の
 厚恩、月日も既に三十歳の今に父母
 ましますか便りも聞ず音信もなきは
 此世にましまさぬ父母なれば未來の
 ため此世におはさば息災延命何卒佛
 陀の妙助にて一卜度逢せたまひ候へ
 ご年頃日頃祈れ共そよこの風の便り

さへ涙のかはく暇もなく鳥にはんぼ
 の孝もあり、鳩に三杖の禮も有、我
 は閻路の玉よびひ生れぬ先の父母も
 空なつかしき、はかなさよ衣の袖
 にふりかゝる露の涙の玉散て餘所の
 見る目も痛はしき、僧正涙押し拭ひ
 何心なく木の元を見やり候へばこた
 く〜ご文字のあいる白紙の記出せし
 に御不審まし〜て心得ぬ一方なら
 ぬ此杉は心持つて廻りに垣なす愛樹
 ……ご二月堂の石垣の畔にある巨き
 な杉の木に貼紙したるを打眺めた良
 辨僧正は、はて不審なり、我が幼な
 きごきの事をかくも貼紙に記したる
 は誰人なるかご境内を探させますご



七回忌
追善証言
空也念佛

七回忌
追善証言

空也念佛

- 竹本 土佐太夫
- 竹本 さの太夫
常子太夫改メ
- 竹本 文字太夫
- 豊竹 綾太夫
- 竹本 大隅太夫
- 竹本 相生太夫

この空也念佛は天平年間空也上人の創らるゝところ上人は忝くも醍醐天皇第二の宮に在しませしを御出家遊ばされ、朱雀天皇の御宇天慶元年一字を御建立あらせられ紫雲山光勝寺極樂院と稱したまひ別名空也堂と申し上げたもので、現在京都嵯峨師に現存して御座あります。この空也と稱されてゐる宗門は元々延暦寺の天皇宗から發して別に空也派が獨立してゐるのであります。八十六代、九百六十年の久しき歴史を持つてゐます。この空也念佛は念佛和讃を唱じ

乍ら九僧立の御僧供僧が鉦と太鼓と瓢箪で風雅な念佛踊りをいたします九僧立と申しますのは導師を真中に貞盛と稱する僧が瓢箪を持って前に立ち太鼓鉦を持つ僧が導師を取巻いて念佛を唱讃し乍ら足拍子揃えて踊るといふのですその行体はと申しますと導師は白衣に手甲脚絆を用ひ黒の素絹を着し木蘭麻の法衣を纏ひ貞盛頭巾を冠り脇小五條袷袢を掛け修陀羅を着け手に鹿角のついた杖を持って和讃の音頭をさるのだそうです。貞盛僧は大瓢箪を持って踊りその他の役僧も皆黒素絹に貞盛頭巾といふいでちです。もこは素足の草鞋履であ

竹本越名太夫

つたそうです、また茶釜も空也上人

竹本鶴尾太夫

の王服茶釜が嘴矢となつて擴まつた

竹本町太夫

ものです。抑も村上天皇の御宇天曆

竹本浪花太夫

年間、平安城を始め洛中洛外に悪疫

豊澤仙 糸

流行したので雲上に献じた王服茶釜

豊澤猿二郎

を數多造り十一面觀世音の御像を自

鶴澤友 平

ら彫み洛中を練歩き茶の施行をした

豊澤猿太郎

まゝころ悪疫忽ち退散したま傳へられ

豊澤猿 糸

てゐます。

豊澤廣太郎

この度越路太夫並びに名庭絃阿彌の

鶴澤淺 造

七回忌に相當いたしますのでその追

鶴澤友 作

善冥福のため由緒のあるこの空也念

鶴澤友 二

佛を選んで舞臺に上せた次第で御座

豊澤仁 平

ゐます。次に空也念佛和讃を寫しま

空也念佛和讃

世の中は只露の間の雨やどり隨意の
住家は來世なりまはめいかのさとし
恐るべし靜かに浮世を感ずればあす
の命も期しむたし煩惱愚人の濟度の
爲さて都の町を修行し給ふ其の威徳
の有がたき聖人は紫衣に錦の大五條
其外役寺役からの御僧供僧の備へを
立て黄金のふくべ白銀の瓢をたく
鉦太鼓殊勝にぞ猶法徳の尊さかりけ
る次第なり斯も悟れる宗葉の學ばん
事のあらすやと思ひやたる風流この
み春は花見に世をうか／＼さうかれ
鳥の音もつれし夜のさぼそをほそ

人形

一、禪才坊 吉田榮 三

一、禪入坊 吉田文五郎

一、空也上人 吉田玉治郎

一、禪良坊 吉田玉 七

一、禪仁坊 桐竹政 龜

一、禪正坊 吉田玉 松

一、空信坊 桐竹紋十郎

一、禪也坊 吉田扇太郎

くこ音信くるはたそやこ見ればち
まつこ水鶏の夜の友秋をまねたる尾
花は露と寝物語りも有明月のあかね
別をたが白妙の雪やあられに吹きこ
るぶこも何のいこばん瓢箪酒のさつ
かけ引かけむだに用ゆる此のふくべ
あら勿体なや御佛の教へを肯々煩惱
のまふや人目の中くり中立入りぬ口
切と後は浮名の下地窓かけもる月の
さしつけて夫と云はれど世の人の口
にさる戸も立られず苦舌にさげし茶
釜髪にくい頭の鉢たき瓢箪ならぬ
すみさりのふくべの花は夕顔の思へ
ば浮世は程もなし榮花はみなこれ春
の夢名利の心をさめていそいで淨

土を願ふべし、南無阿彌陀佛なもう
だく願ふ淨土は他にあらす聖衆の
來迎時を待つ南無阿彌陀佛なもうだ
く三界所廣けれど來りて止まる所
たさへば夢にぞ似たりけり。



中
妹背山婦女庭訓

山の段

妹背山の段

脊山の段

大判事

竹本津太夫

正本名題「十三鐘 絹懸柳 妹背山婦女庭訓」は明和八年正月に書卸されたもので作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南で三好松洛が後見となつてゐます。全五段から成立つてゐますがこんごの『山の段』は恰度三段目の切でありまして、書卸當時は染太夫と春太夫が語り、人形の方は大判事を吉田才治、後室定高を田中小八久我之助を井原眞吾、娘羅鳥を吉田島八が遣てをります。この淨瑠璃は王朝物の代表的傑作で、結構の雄大

趣向の奇妙、章句の優麗な點に於ては淨曲中隨一であります。この『山の段』の内容はと申しますと……王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地づくから、紀州脊山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の少貳國人の後室定高とが國境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつ付けてゐたが、清澄の倅久我之助は何時しか國人の遺子の羅鳥と相思相愛の仲となつてゐました。處で當時國政を自由にしてゐた蘇我の入鹿は其權勢を恃んで羅鳥を後宮に迎へよふごし、其手段として久我之助に難題を言ひかけて自滅させる

鶴澤友次郎

ま、雛鳥も入内を拒んで、久我之助に操を立て、母の手にかゝつて雷の花を散らすさいふ筋で、淨瑠璃は元

ころなご筒有藝術の獨壇上で優粋の絶品でありませう。床本の序を寫しますと、

久我之助

豊竹古剏太夫

より歌舞伎でも兩床を使つて掛合ひで演じるこゝになつてゐます。舞臺は春山、妹山に櫻の満開を見せその映を吉の川の清流が春霞に和して流れてゐる壯大な景で川を隔て、可憐な戀が芽生え、落花のやうに青春が散つてゆくさいふ繪と詩に包まれた暢びやかな雅趣のある狂言であります。

M 往古の、神代の昔山跡の、國は都の始めにて、妹春の始め山々の、中を流るゝ吉野川。塵も芥も花の山げに世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所。妹山は、太宰の少貳國人の領地にて、川へ見越しの下館。春山の方は大判事清澄の領内。子息清船日外より爰に勘氣の山住居、伴ふ物は菓立鳥、既さ我と只二つ、經讀む鳥の

鶴澤清 六

親達の心も解け合ひ雛鳥の首が形見の爪琴に乗せられて吉野川の川瀬を渡つて久我之助の許へ興入れするこ

音も澄みて、心細くも哀れなり 頃は彌生の初つ方、此方の亭には雛鳥の、氣を慰めの雛祭り、桃の節句の

妹山の段

定 高 竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

供物、萩の強飯侍女の、小菊、桔梗が配膳の、腰もすうばり春風に、柳の楊杖近端く、詞喃小菊、平常のお雛は、御殿でお祭りなさるれど、姫様ののおしつらひで、此山崖の假座敷谷川を見晴し、櫻の見飽き、雛様も一入お氣が晴れて可からうの、此方も追付け好い殿御をもつたら、常住あの方に引付いてゐたら嬉しかる。つら桔梗の何いやるやら、何程女夫並んでゐても、あの様に行儀に畏つて斗りゐて、手を握る事さへならぬ窮屈な契はや厭、肝心の寝る時は、離れぬの箱の中、思の斷える間ばあるまいぞ。仇口にも雛鳥の、胸に

あたりの人目堰く、辛い戀路の其中に、親も親もは昔より、御中不和の間さなり、逢ふ事さへも片絲の、結ばれ解けぬ我思ひ、戀し床しい清船様、此山の彼方にて、聞いたを便り母様へ、お願ひ申して此假屋、お顔が見たさの出養生、爰迄は來たれども、山も山もが領分の、境の川に隙てられ、物言ひ交はず事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ、今は却々思ひの種、いつそ隔て、戀ひ乍びる、逢れぬ昔も勝しぞかしと、切なる思ひ搔くごき、歎は俱に侍女共、お道理でござります。ほんにひよんな情事で、隣同志の紀の國大和、御領分の

琴野澤勝三郎

競分で、詞お二人の親御様は摺れ摺れ、雛鳥様ご久我の助様の妹春の中を引分くる、妹山脊山船も筏も御法度で、唯だ此川一つ、つい渡られさ

雛鳥 竹本鏡太夫

うなもの、小菊瀧踏して見やらぬかチ、滅相な、此谷川の逆落し、組州浦へ一ときに、流れて往たら鮫の餌食。したが申し雛鳥様お前の病氣をお案じなされ、此假屋の出養生さし

腰元 竹本さの太夫

なすつたは、餘所作ら久我様にお前を逢はず後室様の粹なお捌き、女夫にして下さりませと、直にお願ひ遊ばしたら、よもや厭さは岩橋の、渡る事こそならずとも、却て遠目にお姿を、障子ぐわらりさ椽端に、覗

き溢るゝ腰元共、久我の助はうつつとつと、父の行末、身の上を、守らせ給へご心中に、念彼観音の經机、案じ入つたる顔形、手にさるやうに、喃あれ、詞机に凭れて久我様の物思はしいお顔持、お癩も起りつらん、詞エーお傍へ行き度い、コレ爰にあるわいなご。いへご招げご谷川の、漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ詞エー辛氣、此方が思ふやうにもない、コレこつちや向いて見たか可いご焦燥るお傍に氣の付に。詞ほんに夫よ、口ではいはれぬ心の丈、豫て認め奥山の、鹿の巻筆封じ文、戀し小石に縛りそへ、女の念の通せよと

豊澤新左衛門

人形

祈願を籠めてうつ礫、からりさ川に
落ち瀧津、波にせかれて流れ行く。
詞エーごんな心の念は届いても、女
の力の届かれば、思ふた計り片便り
返事を松浦佐用姫の、石になりさも
なりたいさ、ひれふす山の効もなき
久我之助川に目を着け 何處よりか
水中に、打つたる石は重けれど、逆
捲く水の勢に、沈みもやらず流るゝ
は、ム、重き君も、入鹿さいふ逆臣
の、水の勢には敵對難き時世の習。
夫を知つて暫しの中、敵に従ふ父大
判事殿の心。善か悪かを三ツ柏、水
に沈めば願叶はず、浮む時は願成就
吉野を假の御祓川、大神宮へ朝拜せ

んさ、柏の若葉摘取つて、谷を傳ひ
に水の面、見遣る女中が、申しく
詞いまの小石が届いたか、久我様が
川へ下なさるゝ、あの岩角の折曲り
が、川巾がいつち狭い、幸の好い逢
瀬さ、いふに嬉しさ雛鳥の、飛立つ
許り振袖も、裾もほらく坂道を、
折柄風に散る花の、櫻か中の立姿、
しごげ、難處も厭ひなく、喃う久我
様が懐かしやさ、いふに思はず清船
も雛鳥無事でと顔々顔。見合す計り
遠き間の、心計りが抱合ひ、詮方涙
先だてり、詞申し清船様、わしやお
前に逢たさに、病氣さ云立て爰迄は
來てぬれど、親の許さぬ中垣に、忍

一、久我之助清舟 桐竹政龜

一、娘 雛鳥 桐竹紋十郎

んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年に

一度は七夕の、逢瀬はあるに此やう

に、お顔見なむら添ふ事の、ならぬ

は何の報ぞや、妹脊の山の中を隔つ

る、吉野の川に鵲の、橋はないかこ

口説言聞く清船も、楫あらば早渡り

たき床しさを、胸に包みて、詞道理

く我も心は飛立てど、此川の法度

厳しきは親々の不和計りでなく、今

入鹿世をさつて、君臣上下心々、隣

國近邊こそ雖も、親みあらば徒黨の企

てあらんかこ、互に通路を警めて、

船を泊たる此川は、領分を分ける關

所も全然、命だにあるならば、又逢

ふ事もあるべきぞ、今流したる水の

柏、波に揉れて浮みしは心の願ひ叶

ふ報せ、入鹿を捉殿しければ、我も

世上を憚りて、此山奥の隠れ住、心

の儘に驚の、聲は聞けども籠鳥の、

雲井を慕ふ身の上を、思ひ遣られよ

雛鳥こそ、儘ならぬ世を怨み泣、詞喃

又遇ふ事もあらうさば、別るゝ時の

捨詞、假令未來の父様に、御勘當受

けることも、わしやお前の女房ぢや、

逆も叶はぬ浮世なら、法度を破つて

此川の、早瀬の波も厭ふまじ、何處

如何なる方へなご、連れて退いて下

さんせ、詞私其處へ行ますこ、既

に飛込む川岸に、慌て驚き留むる侍

女、イヤく放しやま泣入る娘、詞

一、腰元小菊 吉田文作

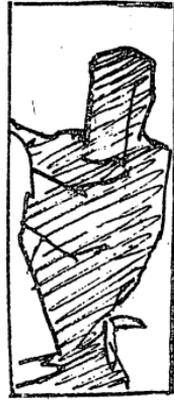
一、腰元桔梗 吉田市松

一、大判事清澄 吉田榮三

ヤレ短慮たんりよなり雛鳥ひなどり、山川やまがはの此早瀬このはやせ、
 水練すゐねんを得たる者ものだに渡り難わたがたき此難所このなんじよ
 忽たちまちち命いのちを失うしなふのみか、母後室はごうちうに歎なげき
 を懸かけ、我われにも愈々いよいよ憎惡にくしみを懸かる科さかを
 重かさねる道理道理、必ず逸かたはり召めれなご、制せい
 する詞ことば一筋すじに、思おもひ詰つめたる女氣をんなぎも
 今更弱いままよはる折おこそあれ、詞ことば大判事清澄だいばんじきやうせい
 様御入さまおなりMご報ほうする聲こゑ、はつご
 驚おどろき久我之助くがのすけ、歸かへるを名残なごり、押留おしとどむ
 るも、我身わがみを我身わがみの儘ままならず、コレ
 嘯待のうまつての聲計こゑあかり、後室様ごうしうさまお出いでご、
 告つぐる下部しもべに詮方せんかたも、泣なくく庵いほりの
 うち悄ほほれ、登のぼる坂まかさへ別路わかれぢは、力難ちからた
 所ところをゆく心地こころ、空そらに知れぬ花曇はなぐもり、
 花はなを歩あめご武士ぶしの、心こころの嶮岨けんけん刀やして

一、後室定高 吉田文五郎

削けるむ如ごとき物思ものおもひ、思おもひ逢瀬あはせの中なかを
 裂きく、川邊かはべ傳たひに大判事清澄だいばんじきやうせい、此方こなた
 の岸きしより太宰だざいの後室ごうしう、さだかに夫それご
 道分みちわけの、石いしご意地いぢを向むかひ合あふ……
 ……ご詞章しじやうの秀麗しうれい、構想こうきやうの雄大豔冶ゆうだいたんげ
 なる洵まことに淨曲じやうきよく中の傑作けつさくであります。



野崎村の段

切 おそめ 久松新版歌祭文

野崎村の段

この正本は安永九年九月の稻荷篤藏座に書卸された近松半二の傑作で、

上下二段に別れており、上の巻は座摩社の段、野崎村の段、下の巻は長町の段、油屋の段となつております

切 竹本大隅太夫

鶴澤道八

ツレ 竹澤團六

これよりさきに正徳元年四月に組海音の作『油屋お染袂の白紋』があり續いて明和四年に菅専助の『染模様妹脊門松』があります。半二はこの二作から粉色したのです。後世この歌祭文の方も歌舞伎にも移入されて持囃されるに至つたのです。この初

演は大好評で五十餘日も打通したと傳へられてゐます。

實説として傳へられてゐる處では延寶七年九月二十九日大阪東横堀五屋橋の油屋の娘お染(二歳)を丁稚久松(十三歳)が子守してゐる間に、お染が川へ落ちて死んだので、その言譯のために土藏の中で久松は縊死したといはれてゐます。全段の内容を申し上げます。和泉國石津の家中相良丈太夫は家寶吉光の短刀紛失の爲にお家改易となり、一子は攝州野崎村の百姓久作の家に預けられ久松と呼ばれてゐたが行儀見習の爲に瓦町の質店油屋へ奉公に出てゐるうちに

ツレ 鶴澤 網右衛門

ツレ 鶴澤 清二郎

人形

一、娘 おみつ 吉田 榮 三

一人涙のお染と人目を忍ぶ仲となるが、お染は山賀屋へ嫁入せればならぬ身の上であり、久松も座敷社で金を盗まれた落度もあつて二人は生木を裂かれて久松は野崎村の久作の家へ歸されます。お光は、許嫁の久松が歸つたので大よろこび久作は二人に夫婦の堅めをさせよふと祝言の仕度にかゝつてゐるところへ、久松戀しいお染は、野崎の親音詣りをかこつけて久松に遇ひに來ます。お染久松お光と三角關係の戀のいきさつが生じます。貞女なお光は自分の戀をお染に譲つて髪を切つて、あきらめられぬ心を二人の幸福に捧げます

油屋からお染の後を尋ねて母が來るし、久作も心のはなむけと紅梅の一枝を渡して、久松は陸路を駕でお染は舟で大阪へ歸るさいふ御存じの道行になります。この『新版歌祭文』には半二獨自の絶妙な對立法が構成されてゐます。門口にお染と灸點えをする親子三人の對立の手續など、恰度次狂言の『妹脊山』にも見受けられます。床本の序曲を一節御紹介しますと……M 跡に娘は氣もいそぐ、日頃の願ひが叶ふたも、天神様や親音様、第一は親のおかけ、詞エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結ふて置かうもの、鐵漿のつけ様換

一、下女およし

吉田文之助

拶も、どういふてよかるやら、覺束
繪こしらへも、祝ふ大根の友白髪、
未菜刀も氣もいさみ、手元も狂ふち

早うくさ追ひやりく、立寄りな
から越かぬる、戀の峠の敷居高く、
詞もの申すお頼み申しませうと、云

一、親久作

吉田玉松

よきくく、切つても切れぬ戀衣
や、本の白地をなま中に、お染は思
ひ久松が、跡をしたふて野崎村、堤
傳ひに漸々さ、梅を目當に軒のつま

ふもこわく暖簾越、詞百姓の内へ
改まつた、用があるなら入らしやん
せ。ハイく、卒爾ながら、久作様
は内方でござんすかへ、左様なら大

一、丁稚久松

吉田光之助

供のおよしむ聲高に、詞申し御寮人
様、彼人に逢はうばかり、寒い時分
の野崎参り、今船の上り場で、教へ
て貰ふた目印の此梅、おゝかた爰で

見えた筈、ちよつと逢はして下さん
せと、云ふ詞つき形姿、常々聞いた
油屋の、扱はお染さ倍氣の初もの、
胸はもやくかき交ぜなます、まな

一、娘お染

桐竹紋十郎

ござりませうぞへ。アーコレ、もそ
つと靜に云やいの、久松に逢ひたさ
に、來たここは來ても在所の事、目
立つては氣の毒、そなたは船へ、サ

板押やり、戸口に立寄り見れば、見
る程美しい、詞あた可愛らしい其顔
で、久松様に逢はしてくれ、ホゝそ

一、久作女房 吉田玉七

んなお方はこちや知らぬ、余所を尋

ねて見やしやんせ、あほうらしいこ

腹立聲、心つかればホンニまあ、詞

何ぞ土産と思ふても急な事、コレコ

レ女子衆さもしけれどこれなりと

夢にも夫と白玉か、露を帛紗に包の

まい、差出せばコレヤ何んぢやへ、

詞大所の御察人様々こ云ばれても、

心かいたらぬ置かしやんせ、在所の

女子と侮つてか、ほしくばお前にや

るわいなさ、やら腹立ちに門口へ、

ほればほごけてばらくと草にも露

銀けし人形、微塵に香箱割出した、

中へつかく親子づれ出て来る久作

詞どうぢや、なますは出来たであら

う、扱祝言のこま婆が聞いて、きつ

い悦びぢやが、年は寄るまいもの、

さつきのやつさもつさで、取上した

か頭痛もする、いかう肩がつかへて

来た、ア、橙の敷は争はれぬものぢ

やわいの、左様ならそうく、私わ

揉んで上げませうか、ヤア、ソリヤ

久松 忝い、老ては子に従へぢや、

孝行に片身恨みのないやうに、お光

よ、三里をすゑてくれ。アイくそん

なら風の来ぬ様にご、何かな表へあ

たり眼、門の戸びつしやりさしもぐ

さ、燃ゆる思ひは娘氣の、細き線香

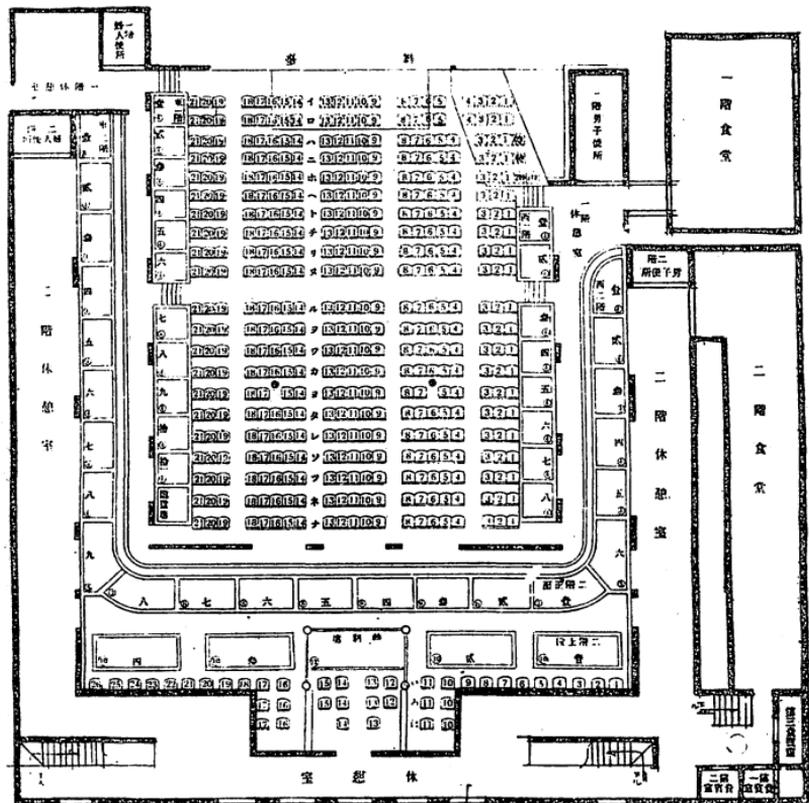
に立つ煙り……色かさまざる野崎

村の儼麗な一段で御座います。

一、油屋お勝 桐竹紋太郎

一、船頭吉松 吉田玉市

文樂座御席場案内



喫煙室

喫煙室

御観覧料の外一切御不要の上
大部分椅子席になつて居りま
すからお一人でも御愉快に洋
服でもお樂に御見物が出来、
またお出入が御自由です。

前賣切符一等お座席一等椅子
席のお切符は五日前から發賣
致します、また五日以後のお
切符も一等席に限り御豫約申
上げますから上層の座席表
に依つてお早く御望みの御場
席をお申し込みになればお心
のまゝにお好きな處が御自由
にされます御用命の節お呼出
しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場一等席切符は當日、
前賣も正面西側本家入口に
て發賣して居ります。

二、三等切符は當日正面入口
にて發賣致します。

尚多人數様お団体様のお申込
も御相談いたします。

好評噴々新時代の流れ

文樂座の御宴會

□世界の唯一者日本固有の古典藝術の殿堂四ッ橋文樂座の三〇年式企劃『文樂座の御宴會』を創設いたしました。時節柄料金、時間ともに最も經濟的に、しかも興味と御愉快の多大なる、皆様本位の新しい趣向。

□文樂座一等席で人形淨瑠璃を御觀覽

□文樂座食堂で市價と變らぬ値段の御定食

□文樂座特別設置の寫眞部でお揃ひの記念撮影

□この素晴らしい組合せ一人前金五圓といふ至廉な料金で皆様を『文樂座の御宴會』へとお迎へ申上る次第です。

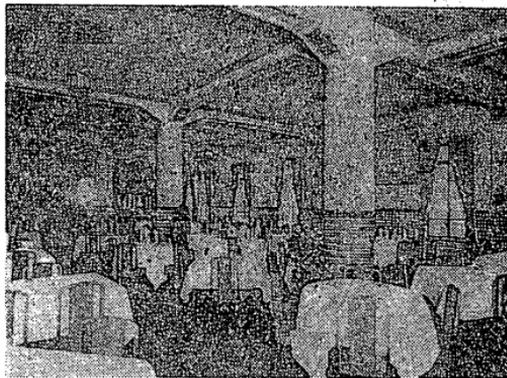
□お申込は二十人様以上を受付申上ります。

□記念撮影のお寫眞は終演と同時に所持歸り出来るやういたしております。

□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします。

□お申込は四ッ橋文樂座事務室へお願ひします。

□お申込についてお電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ



南一直營 文樂座食堂御案内

貳階洋食堂

壹階和食堂

スピードアイナー(御定食)	一、五〇	吸付辨當	一、〇〇
スーパ	三、五〇	御食事	〇、〇〇
魚フライ	時價	茶碗むし	五、〇〇
海フライ	時價	親子井	五、〇〇
オムレツ	三、五〇	お吸物	三、〇〇
コロツケ	三、五〇	卯の花汁	三、〇〇
ビーフカツレツ	三、五〇	むし壽司	五、〇〇
チキンカツレツ	五、〇〇	にぎり壽司	五、〇〇
ビーフステーキ	五、〇〇	ちらし壽司	五、〇〇
カレーライス	三、五〇	雀すし	五、〇〇
チキンライス	三、五〇	鐵火卷	五、〇〇
コールドチキン	五、〇〇	特アサヒビール	五、〇〇
コールドビーフ	五、〇〇	菊正宗	五、〇〇
ハムサラダ	五、〇〇	洋酒	各
マカロニチース	三、五〇	コーヒ	一、〇〇
		アイスクリーム	二、〇〇
		ダイヤレモン	三、〇〇

御豫約

一暮前にお豫約願ひますとお席を設けてお待ち致します(御豫約は食堂入口で承ります)

(館別西は食堂)

文 樂 座 使 用 規 定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス
但シ長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備ヲサレル事が出来マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、若シ之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ、費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出来マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝 (自正午至午後五時)		夜 (自午後六時至同十一時)		晝 (自正午至午後十時)	
		平日	土曜	日曜祭	晝	夜	晝
文樂座	約 850人	80 圓	80 圓	90 圓	100 圓	110 圓	160 圓
		80 圓	110 圓	110 圓	170 圓	180 圓	180 圓
		90 圓	110 圓	180 圓	180 圓	180 圓	180 圓

◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料 晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同 同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺晝夜	1回	10圓
活動寫眞設備 晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同 晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ晝夜	1回	20圓
音樂譜面晝夜	1臺	10錢
アークスポット 晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット 同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト 500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット 100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト 100W 500W	1臺	2圓
フットライト 20W 100W 7球	1本	1圓
ゼラチンペーパー	1枚1回	1圓
大 衛 立 晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備 同	1回	2圓
其 他 必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、電話係2名、下足2名	1日1人	1圓宛
冷風裝置使用料		16圓
暖風ラヂエータ使用料		無料
		無料

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び塲内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへ願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成べく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お塲席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お塲席券は

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお塲席の番號をお忘れないやうに願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由に御飲下さい。

幕間中は

寫真撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出塲不可能の場合には乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。正面西側本家茶屋階段下に御座います。

お電話は

四ツ橋 文樂座

前賣切符専用電話南四七一一番

電話南 七四〇八番
三七八八番

◆文樂座御ひるき名簿募集◆

一、お申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい。

(御住所御芳名の他一切不要)

一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市南区四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部わかる唯一の文献

「文樂今昔譚」 特價金貳圓にて發賣

幕間の御休憩に是非一冊

月刊「道頓堀」 一部 金三十錢

美しいグラフィック興味ある好讀物

所刷印 者刷印 人行發兌輯編

刷印日五月三年五和皇

堂英日井永・郎三太井永・三良塚大

行發日六月三年五和皇

目一一通堀佐土區西市阪大 目一一通堀佐土區西市阪大 座樂文・橋ツ四・阪大

若く明るい顔に
るち

トレト白粉



平尾黄平商店